総合医学会報告

シンポジウム2：「看護師のチーム医療　-真の看護の専門性とは-」

看護実践の場面から学ぶ力を育む
－臨床現場での経験や事例を題材にした学習－

石原尚美†

第65回国立病院総合医学会
（平成23年10月8日　於岡山）

IRYO　Vol. 66　No. 11（640－642）2012

要旨　九州医療センターでは看護職の教育について独自の教育プログラムを構築している．各コースのねらいや参加する看護師の経験年数やキャリアの差はあっても，大切にしたいと考えているのは臨床現場での経験や事例を題材にした学習である．臨床現場での経験や事例には，看護師である自分，患者・家族，他の看護スタッフ，医師，コメディカル等の他者の存在と相互作用，自分自身の感情や思い，実施した援助や行動が包含されており，とても豊かな教育資源である．

集合教育で，自らが行った行為の意味や適切性を患者や家族，同僚の看護師や他職種の反応をもとに，評価および分析し自己の学びとする．この評価および分析の過程は，まず自分自身で，そして自分以外の研修生とのディスカッションや研修担当者のアドバイスにより深められる意図的かつ段階的なものである．この過程での学びの実際は，研修生の語りやレポートの内容から読みとることができる．集合教育の場で得た学びを，臨床現場での新たな対象との出会いや実践での適用を通してさらに深め，確かなものにしていく．集合教育で得た学びは，臨床現場で活かされてこそ意味がある．しかし，この点について，まだ十分取り組めているとはいえない．看護スタッフ全員が看護実践や経験，事例検討の意義を認識し，それらの検討の視点とプロセスを日常で意図的に活用していく力を育む必要がある．今後の課題は人材育成を含め，臨床現場での学習の支援ができる環境をどのように整えていくかにある．

キーワード　臨床現場，経験，学習，看護実践

はじめに

真の看護の専門性とは何か．教育担当師長として感じているのは，看護師が成長していくには看護実践の現場から学ぶ力が必要不可欠であり，その力を育むことが重要だということである．そして，この力を身につけ，活用していくことが，看護職としての専門性を高めることにつながっていると考えている．そのためにどのようにすればよいのか，答えをみつけることは難しいが，現在取り組んでいる臨床

国立病院機構九州医療センター　看護部　†看護師
（平成24年2月17日受付，平成24年9月14日受理）
The Educational Method Dealing with Experience of the Clinical Spot is Effective
Naomi Ishihara，NHO Kyusyu Medical Center
Key Words：clinical spot，experience，nursing practice

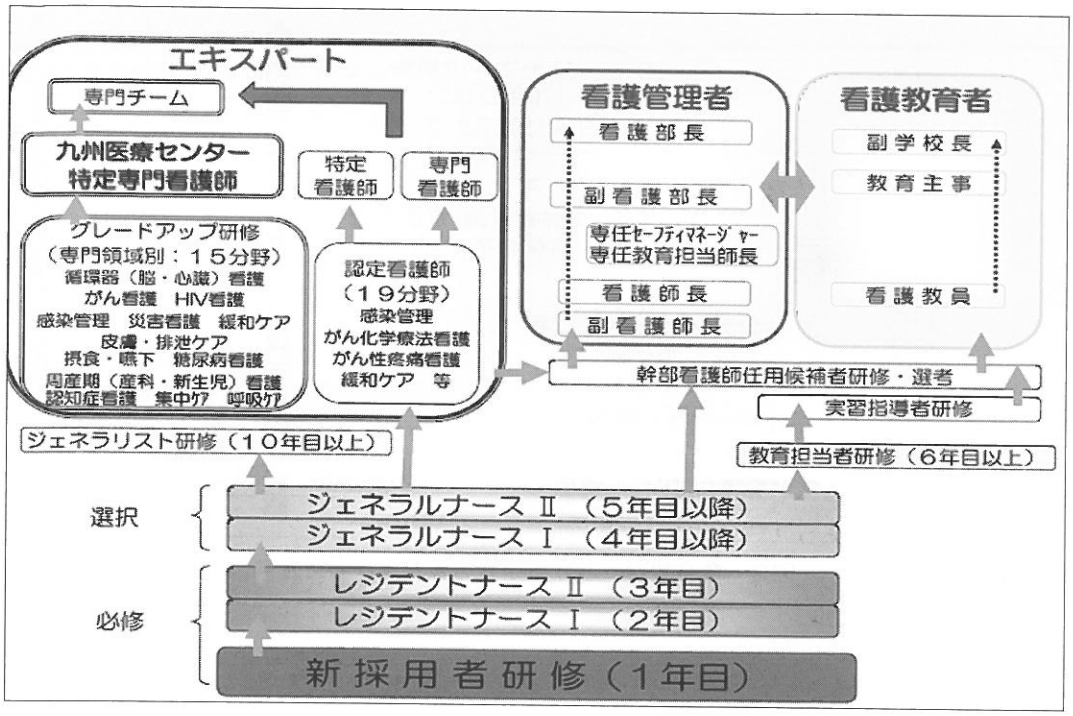

図１　九州医療センター看護職員能力開発およびキャリアパス

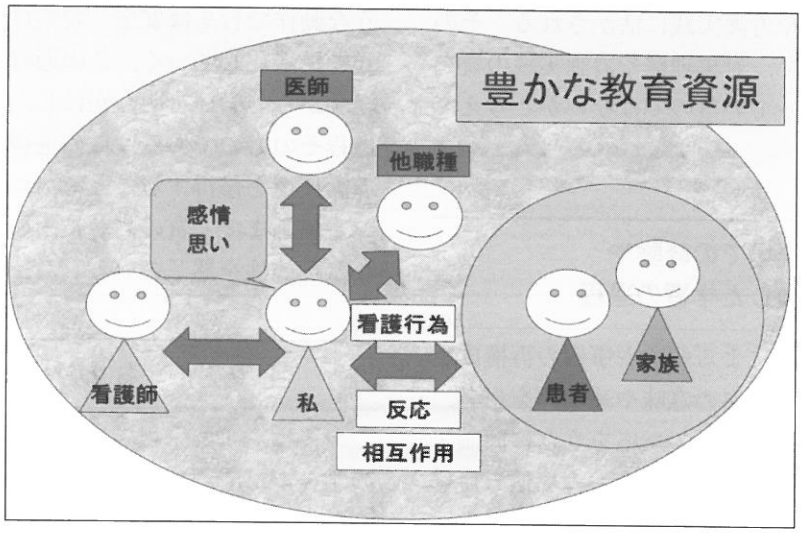

図２　臨床現場での経験や事例

現場での経験や事例を教材とした研修の実際について述べる．

看護部教育プログラムおよびキャリアパス

九州医療センターの教育研修プログラムとキャリアパスを示す（図１）．入職１年目～３年目までは必修とし，４年目以降は選択制としている．

各研修コースのねらいや，対象とする看護職の経験年数，キャリアに差はあっても，大切にしたいと考えているのは臨床現場での経験や事例を題材にした学習である．臨床現場での経験や事例には看護師である自分，患者・家族，他の看護スタッフ，医師，コメディカル等の他者の存在と相互作用，自分自身の感情や思い，実施した援助や行動が含まれていて，豊かな教育資源であると考えている（図２）．

新採用者研修では，印象に残った場面や看護を感じた一場面について，レジデントⅠ（２年目研修）では事例研究，４年目以上のジェネラルⅠ研修では

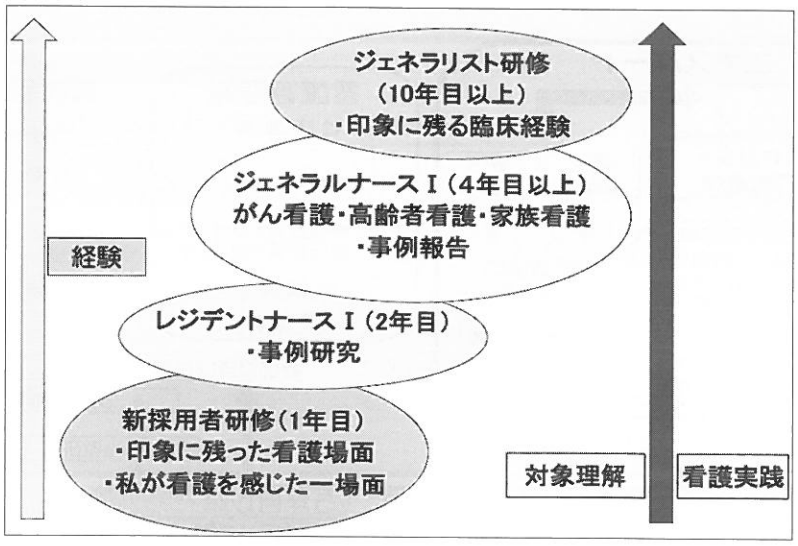

図３　集合教育における研修方法および考え方

事例報告，10年目以上を対象としたジェネラリスト研修では，印象に残る臨床経験をレポートにしている．経験した状況の意識化や言語化をはかり，経験を意識化，言語化，意味づけすることによって，臨床現場での対象理解や看護実践に活かされる．その過程の繰り返しを経て，対象理解や看護実践の質を高めることにつながっているのではないかと考えている（図３）．

臨床現場での経験や事例を通した学習の過程

第１段階として自己による経験や事例の再構成を行う．この段階では，行為の意味や適切性を患者，家族，同僚の看護師や他職種の反応をもとに評価・分析を行う．第２段階として，集合教育で他の研修生との意見交換を行い，研修担当者である教育委員や看護師長からの助言をもとに再考する．第３段階として，第１段階から第２段階で得た学びを，次の看護場面で活かす臨床現場での実践が位置付けられる．第１段階と第２段階については，研修生の反応やレポート等からその内容がある程度明らかになり理解することができるが，第３段階については実際にどのように活かしているか，実践にどのようにつないでいるかについて評価できていないのが現状であり，今後の課題である．さらに，経験や事例からの学びを実践にどのように活かしていくか．その一つの方向性として，臨床実践能力の構成要素として位置付けられている“看護技術”．その質の向上に活かしていきたいと考えている．診療科や入院患者の特徴についての気づきや理解を言語化し，どのような動作で行えば安全・安楽に援助できるかを検討して構造化していく．この過程は意識できていない経験からの学びを明らかにし，実践に活かしていく過程そのものである．この過程を経て構造化された看護技術を修得することで，新人看護師からベテラン看護師まで，質の高い技術の提供ができるようになる可能性を感じている．

おわりに

今後は，①臨床現場における看護実践の経験からの学びが，看護職として専門職としての学習となることの理解への支援，②臨床現場での経験からの学びを言語化し共有化する学習環境づくり，③経験から得た対象理解による，各診療科および入院患者の特性を考慮した看護技術の構築と修得，以上３点について取り組み，その効果を明らかにしていきたい．

〈本論文は第65回国立病院総合医学会　シンポジウム「看護師のチーム医療」において「看護実践の場面から学ぶ力を育む　−臨床現場での経験や事例を題材にした学習−」として発表した内容に加筆したものである．〉